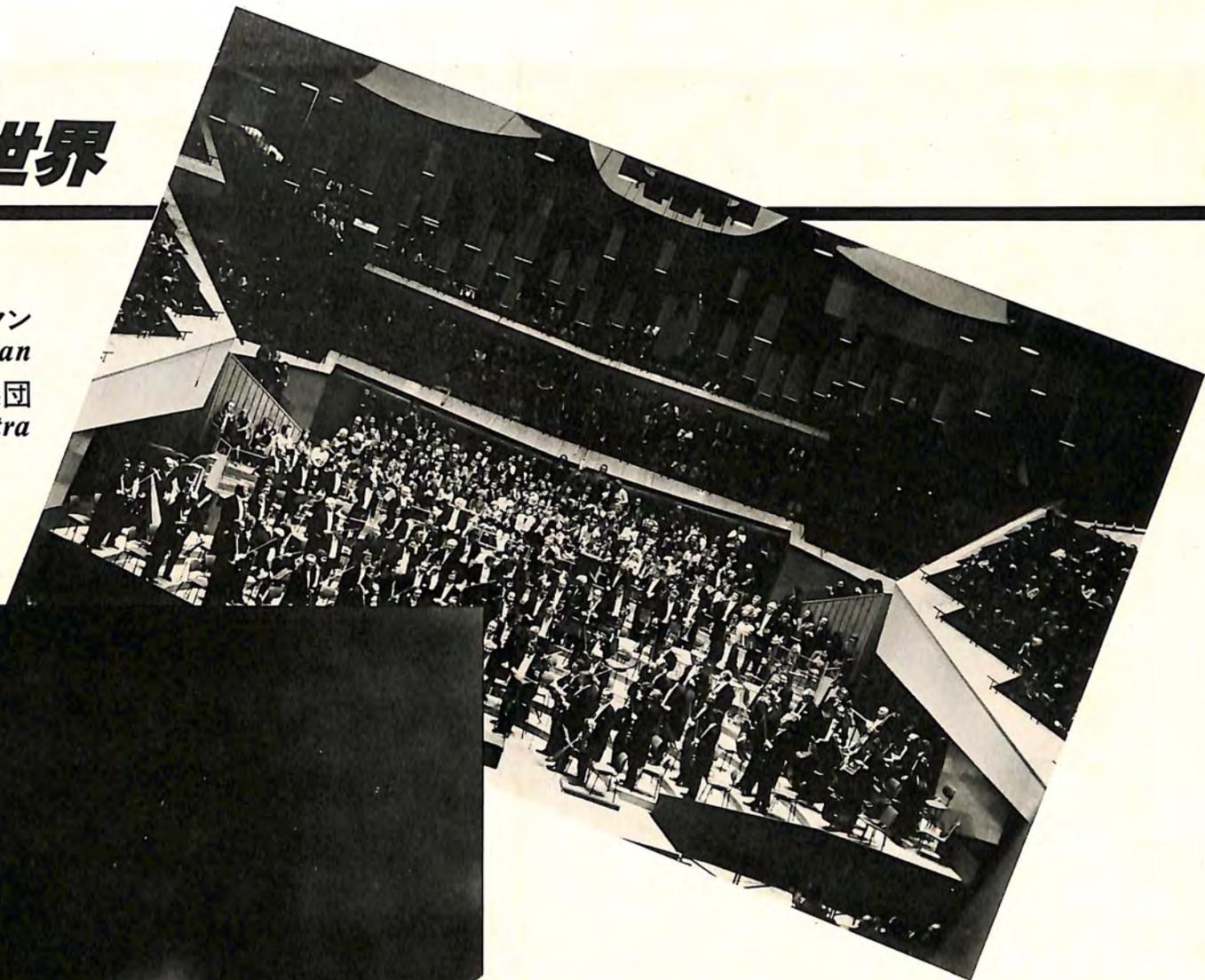


カラヤン／新世界

指揮：ヘルベルト・フォン・カラヤン
cond. by Herbert von Karajan
ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団
Berlin Philharmonic Orchestra



Photo by Dussart



ドヴォルザーク：交響曲 第9番 ホ短調 作品95 「新世界より」
A. Dvořák: Symphony No.9 in E minor Op.95 "From the New World"

SIDE 1 第1楽章 (9' 34")

1st Movement: Adagio—Allegro molto

SIDE 2 第2楽章 (12' 04")

2nd Movement: Largo—Un poco più mosso

SIDE 3 第3楽章 (8' 23")

3rd Movement: Scherzo (Molto vivace) & Trio 1 & 2

SIDE 4 第4楽章 (10' 56")

4th Movement: Finale (Allegro con fuoco)

制作にあたって

日頃は第一家電をご愛顧いただき、誠にありがとうございます。「マニアを追い越せ!! 大作戦」も前回の満10年記念を経て、いよいよ11年目を迎えることが出来ましたのも、一顧にDAM会員の皆様の御支援のお蔭と心からお礼申し上げます。

DAM 45 クラシック・シリーズも、今回で19作目となりました。常に作品(曲)、演奏、録音、と三拍子揃ったものということで、世界に冠たる名盤の宝庫、EMI原盤の中から、あるいはDAMオリジナル録音として、発表させていただいてまいりました。

その中でもアーティストとして登場回数が断然多いのが、ヘルベルト・フォン・カラヤンで既に6回(VIP用逆進行レコード「ラヴェル/ボレロ」を入れると7回)を数えています。

これはカラヤンの音楽が、水準が高い上に難解さが無く、多くの聴衆にわかり易いため、世界的に人気が高く、普段クラシック音楽をお聴きにならない方でも、「カラヤン」の名前は御存知なくらい有名です。

DAM 45の制作ポリシーとして、クラシックの名曲を、巾広い多くの方にわかり易く、それについて演奏の優れたものを提供したいということを選定の規準としております。そうすると、世界の超一流指揮

者カラヤンと超一流オーケストラ、ベルリン・フィルは、イギリス EMI の看板アーティストであり、DAM 45 のビッグ・スター・アーティストでもあるわけです。

DAM 45 のカラヤンのバック・ナンバーの中でも、R.シュトラウスのサロメ、ヴェルディのアイダ、シベリウスのフィンランディア等は、カラヤンのおびただしいレコーディングの中でも、彼を代表する名演として知られ、かつ同曲のベスト・ワンの折紙つきの名盤として評価が高いものです。

ところで、DAM 45 は、マスター・テープの素晴らしさを会員の皆様にお伝えしたいということから、リミッターやイコライザーを使用せず、ストレートにハイ・レベルで45回転カッティングをしているため、レコード1枚での収録時間が25~30分と短くなってしまい、クラシックの大曲を収録するためにはどうしても2枚組となってしまいます。

過去、「ケンペ/アルプス交響曲」、「ロストロポーヴィッチ/シェエラザード」、「ホルスト/惑星」、「ミュンシュ/幻想交響曲」、「宮沢明子/乙女の祈り」と5種類の2枚組DAM 45があり、いずれも御好評をいただいているものばかりですが、カラヤンの2枚組は実現しておりませんでした。しかし今回「マニアを追い越せ!! 大作戦」11年目と、カラヤン~ベルリン・フィルの来日を記念して、ドボルザーク

クの新世界交響曲を、2枚組DAM 45として企画いたしました。

この一年間、世界中の話題となったカラヤン~ベルリン・フィルの騒動もなんとか収まり、この10月懸念された来日公演も実現しております。

この新世界交響曲は、カラヤン69歳の録音で、極めて気力の充実していた頃のもので、カラヤンはベルリン・フィルとこの新世界交響曲を過去4回録音していますが、いずれも名盤の誉れの高いもので、その純音楽的かつ親しみ易い演奏は、世界中で多くのファンの愛聴盤となっておびただしい枚数が発売されています。

新世界交響曲は、クラシックの名曲中、現在、最も人気の高い曲となっていて、その第2楽章は、いわゆる「家路」という名前で、単独に演奏されたり、歌詞がついて広く歌われているので御存知の方も大変多いのではないのでしょうか。

市販盤(EAC-81002)は、A面に第1楽章から第3楽章の約30分、B面に第4楽章と、スメタナのモルダウ(この曲は、既にDAM 45/DOR-0031としてフィンランディアとカップリングして発表しています。)とあわせて約24分という長時間なので、詰め込みカッティングとなってしまい、音質については、不利になっているようです。そこで、DAM 45では、各楽章にそれぞれ1面をあて、各面とも8分から12分という、余裕たっぷりな、ハイレベル・カッティン

グをいたしました。勿論、イコライザーやリミッターも使用しておりません。もともとこの新世界交響曲は、カラヤンの録音の中で、トップランクの優秀録音ではありませんが、そのマスター・テープは、リアルで、ダイナミックレンジの広いエネルギー豊かなサウンドが特長となっています。

第2楽章で活躍するイングリッシュ・ホルンや木管群の豊かで美しい響き、ホルンをはじめ力強い金管群、量感ある弦楽器群等、カラヤンの指揮のもとに、一糸乱れぬ素晴らしいアンサンブルをくり広げる、ベルリン・フィルのダイナミックな演奏をお楽しみ下さい。

なお、低域特性の良い装置で再生された場合、30Hz付近に、録音時の空調ノイズと思われる低域ゴロが一部ありますが、悪しからず御了承ください。

なお、本アルバム作成にあたり、東芝EMI(株)をはじめ、関係各位に多大な御協力をいただいたことを厚くお礼申し上げます。

今後もDAMといたしましては、アナログ、デジタルを問わず、より良い音楽ソフトを開発し、会員の皆様にも少しでもお役にたてるよう、更に一層の努力をする所存ですので、今後とも皆様の御支援のほど、よろしく御願ひ申し上げます。

DAM推進委員会

カラヤン——冬の予感

指揮者フルトヴェングラー没後30年を記念して催されるイベント、そしてカラヤン10度目の来日。——1984年秋、音楽界最大の話題であるこの2つの出来事、歴史の流れにてらして考え併せれば、なんとも皮肉なめぐりあわせのように思えてくる。フルトヴェングラーとカラヤン。かつては火花を散らして競いあった2人だった。

ヘルベルト・フォン・カラヤン。1908年、ザルツブルクに生まれる。'28年、ウルム歌劇場でデビュー、'34年からアーヘン歌劇場、そして'38年からはベルリン国立歌劇場指揮者となる。当時、ドイツ音楽界の「帝王」は、まぎれもなくベルリン・フィルの指揮者フルトヴェングラーだったが、ベルリンにデビューを果たしたカラヤンは「現代音楽界の生んだ奇蹟」とまで評され、ベルリンの人気を二分するほどの勢いで、フルトヴェングラーに肉迫していった。時にカラヤンは30歳、一方、フルトヴェングラーは52歳を迎えていた。

第2次大戦をはさみ、2人の戦いは舞台をウィーンに移して再燃する。1947年、ウィーン・フィルはこの2人の指揮者を交互に迎える。老匠と気鋭。この2人の名指揮者は、伝統ある名門オケを舞台に激しい闘志を燃やして競演、ウィーンの音楽ファンを熱狂させたのだ。

この2人の戦いは、1954年、フルトヴェングラーの死によって幕を閉じる。享年68歳。音楽の世界ではあまりに早いその死であった。翌'55年、ベルリン・フィルは、フルトヴェングラーの死去によって空席となった常任指揮者のポストに、カラヤンを迎える。名実ともにゆるぎない、ただひとりの「帝王」の誕生であった。以来「帝王」カラヤンは、ベルリン・フィルのポストを暖める一方、ウィーン国立歌劇場、ザルツブルク音楽祭、パリ管弦楽団等の指揮者を歴任して今日に至る。

ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団 1882年の創立。フォン・ビューロー、マーラー、R・シュトラウス、ニキシュ、フルトヴェングラーといった錚々たる歴代指揮者のあとをうけ、カラヤンを終身常任指揮者に迎える。シュヴァルベ、ニコレ、ゴールウェイ、ライスターといったソリストを輩出するほどの各パートの、技術的レベルの高さもさることながら、それらがマスとなった時に発揮する合奏能力は、カラヤンによって磨き抜かれ、比類ない高みに達している。全オーケストラによるクライマックスでも音が混濁せず、各パートの旋律は明瞭に聴きとれる。一方、最弱音の部分では音が揺れることなく、絶妙なバランスを保持できる。精密な機械の、精妙な働きを見るような快感を、聴き手に与えてくれる。

そのカラヤン＝ベルリン・フィルのコンビが生まれて29年目のこの秋、フルトヴェングラー未亡人の来日と前後して予定される来日公演は、かつてない関心を持たれ、注目を集めている。きっかけは、ひとつの小さい事件だった。

話は去年にさかのぼる。カラヤンは、ブロードの美人クラリネット奏者ザビーネ・マイヤーをベルリン・フィルに入団させるべく、楽団に提案する。音楽に関する全ての物事を自分の思い通りに成し遂げてきた「帝王」カラヤンにしてみれば、1人の奏者を、自分の楽器ともいうべきオーケストラに加えることなぞ、いともたやすいことに違いない。しかし、案に相違し、楽団の返事はNoだった。その返事に従うには、カラヤンのプライドが高すぎた。彼は演奏拒否という強硬手段をとるに至り、問題はこじれていった。

その後のなりゆきは、クラシック音楽に関心の乏しい本邦の大新聞でも（下世話な興味からか）折に触れ報じられたので、御承知の方も多だろう。ザビーネ嬢は「カラヤンとベルリン・フィルの双方

に御迷惑をかけた」と自発的に入団辞退を表明する。しかし一旦振り上げた拳の持つていきどころもなく、カラヤンは強硬態度を崩さない。一方のベルリン・フィルも、メンバーの間で「カラヤンは辞めるだろう」と思う者さえ出てくる。両者の中に、ベルリン市長までが入って仲介の労をとり、一応、カラヤンが詫言るといった形で和解が成立したのはつい最近のこと。AP通信発のニュースとしてベルリン・フィルの指揮台に立つカラヤンの姿を日刊紙が（写真入りで）報じたのは、この10月のことだった。一応のオサマリを見せたこの喧嘩だが、メデタシメデタシという訳にはいかないだろう。いってみれば一旦は別居し、離婚さえ決意した夫婦が、家裁の調停でどうにか元のサヤに収まった——そんなカンジだもの、元に戻ったといっても、両者の信頼関係の上に成立する音楽創りに、どう微妙な影を落とすのか、気にならないではいられない。それについても考えてしまうのは、カラヤンも老いた、ということだ。

今までのカラヤン、その矜持と誇りに満ちたライフ・スタイルを考えれば、今回の一件、どうにもおかしい点が多い。まず、ザビーネ嬢へのこだわり。どうしても入団させたいと我をはり通したその態度は、江川入団を思い起させる。理屈の解らぬ子供と、そして子供帰りしてゆく老人とに特有のわがままなのだ。第2に万が一、同嬢がどうしてもオケに加えたい逸材であれば、（カラヤンほどになれば）彼一流の方法を画策して、すんなりと入団までこぎつけることだって出来たはず。入団拒否以来、和解に至るまでの経緯は、カラヤンにしてはカッコ悪すぎる。そしてなにより、カラヤンが譲歩をして和解を求めた事実。一切の譲歩をすることなしに今日の地位を得た彼が、ある意味では誤りを認めてまで、ベルリン・フィルにこだわる必要は、無いはずだ。考えていけばなにやら、わがままを通し、ダグをこねてきた老人が、知る由も無い何かをきっかけに、フツと糸が切れるように、諦めのうちに自らの老いを、痛切に自覚してしまうような……。そんな気がしてならないのだ。

あるところでカラヤンは、こう語ったことがある。「指揮者というのは齢とともによくなるものだ。40でやっと味がわかってくる。60から75までが円熟期だ。」（三浦淳史氏訳）そのカラヤンが、今、76歳。'70年代以降、大きく方向転換をはたして、動から静へ、精緻な静寂を求めて音楽を創り、人生の夕映えにも似た頂点を極めた、その彼の音楽が、今後、どのような響きを求めていくのか、気になるところだ。このレコードは「円熟期」カラヤン69歳（1977）の録音。じっくりいていたベルリン・フィルとの息の合った演奏は、気魄に満ちた名演奏を生み出している。

音楽について

作曲家アントニン・ドヴォルザークはチェコ（当時ボヘミア）の作曲家。1841年、ブラーハ近郊の村に生まれる。幼時からヴァイオリンに親しみ、12歳頃から村の教会オルガニストに、オルガン、ピアノ、作曲等の手ほどきをうける。1857年（16歳）、父の反対を押しきってブラーハのオルガン学校に入学、本格的に鍵盤奏法、作曲の勉強にとりくむ。卒業後の1862年から10年間、ブラーハ国民劇場のヴィオラ奏者を勤めて生計をたてる。その間も作曲を続け、30歳を過ぎた頃からその作品は世間に認められはじめ、ブラムス、リストの激賞をうけるに及んで、その名はヨーロッパに広く知られることとなった。

1891年、50歳のドヴォルザークはブラーハ音楽院教授に就任するが、間もなく、ニューヨークのジャネット・サーバーと名のる女性より、

ニューヨークにあるナショナル音楽院への院長就任を依頼される。食品会社の社長夫人である同女史は、大金持ちをよいことに趣味が嵩じ、音楽学校まで創ってしまったのだった（オーヤ女史のコンサートといい勝負）。同音楽院の2代目院長を物色中の女史はヨーロッパまで足を運んで調べあげ、シベリウスかドヴォルザークかと迷いぬいた挙句、彼に白羽の矢をたてたというわけだ。

一方的に女史より御指名のドボ氏、選ばれたことの恍惚と不安とで随分と悩んだが、そこはそれ、金の力ですわ、サーバー女史より提示された破格の報酬（ブラーハの10倍!!）に意を決し、妻と2人の子供を伴い、大西洋を渡る船に乗り込んだのだった。

田舎育ちの彼にとって、大都会ニューヨークでの暮らしは心安まるものではなかったようだ。ホームシックの彼は、アメリカで初めて耳にしたインディアン音楽、そして黒人霊歌の旋律にみられるリズムや音階の中に、はるか離れた祖国ボヘミアの民謡を想わせる響きを見出す。その暗示をふくらませて交響曲を作ることを思いついた彼は、1893年1～5月にかけてスケッチを進める。そして学校の夏休みには避暑をかねてボヘミア系移民の町スピルヴィル（アイオワ州）を訪れ、同胞に囲まれた寛ぎのうちにオーケストレーションを仕上げ、作曲者自身によって「新世界より」と名づけられた。

タイトルは当時、ヨーロッパで呼びならわされたアメリカの別称「新世界」をとったもの。でも考えてみれば、ヨーロッパ人が勝手に後から発見し上陸して騒いでいるだけで、もとより原住民は騒ぎをよそに住んでいるわけですから、新も旧もあつたものじゃない。随分と一方的な呼び方、差別用語じゃないかしらん。

ドヴォルザークの音楽はしかし、近代化された大都会としての一面は全く触れることなく、あくまで原住民や黒人のフォークロアに材を採っている。その音楽は故郷ボヘミアへの呼びかけにも似て民族精神に富んだ独特な美しさを持っており、国民楽派の雄としての面目躍如たるものがある。初演は同年12月、NY、カーネギー・ホールにておこなわれ、大好評をうけた。

第1楽章 アダージェーアレグロ・モルト ソナタ形式。

黒人霊歌（「スイート・チャリオット」「モーゼス老人」）に着想を得た主題が展開される。

第2楽章 ラルゴ ロンド形式。

「家路」とも呼ばれるこの旋律を知らない人はいないだろう。イングリッシュ・ホルンによって奏でられるこのメロディーは、ドヴォルザークによる純然たる創作だが、言葉や民族を超えて訴える深い感傷に満ちている。

第3楽章 モルト・ヴィヴァーチェ スケルツォ。

2つの中間部をダグウッド・サンドウィッチ状にはさむ、農民の素朴な舞曲。

第4楽章 アレグロ・コン・フォコ ソナタ形式。

金管の、力に満ちた第1主題を中心に展開されるが、第1～3楽章のさまざまなテーマも顔をのぞかせ、力強く全曲をまとめている。

4年に及んだアメリカ滞在の後、ドヴォルザークはブラーハ音楽院に復職する。1901年には同院の院長に就任する。また同年、オーストリア（当時ボヘミアは奥領）の政府より貴族院議員に叙されるなど、ドヴォルザークの後半生は栄光に満ちたものだった。1904年の死に際しては、手厚く国葬によって送られている。 真庭 健



ドヴォルザーク：交響曲第9番ホ短調 作品95「新世界より」

岡 俊雄

は4回録音している。同一レパートリーの再録音の多いカラヤンではあるが、4回以上録音した交響曲というのは至ってすくない。これらの作品にたいする彼の傾倒ぶりを示すものといっても過言ではあるまい。

《新世界》の最初の録音（SP時代である）は《悲愴》と同様、わが国では発売されなかったし、LPにも復刻されていないのでどんな演奏であったかは窺い知る由もない。LP以後の《新世界》はすべて日本でも紹介された。これを整理すると、カラヤンの第2次《新世界》の録音はつぎのとおりで、すべてベルリン・フィルを振ったステレオ録音である。

（日時は録音年月）

②1957年11月／58年1月（EMI＝英コロムビア）

③1964年3月（ドイツ・グラモフォン）

④1977年1月（EMI）

第1次録音だけはきくことはできなかったが、カラヤンの解釈は、ほかの夥しい反覆録音の交響曲の場合のように、最初期のものから、最新録音まで20-30年の歳月を経ているが、彼の解釈の基本路線というものはかわっていない。これは、各楽章のタイミングにきわだった変動がないということにも現われている。異なる時期の録音を、演奏時間に大差がないからといって変わらないといいきってしまふことは少々乱暴であり早急な結論のようにうけとられてしまふようであるが、カラヤンの場合は、解釈の根幹をなすものが、早くから打ち出されており、それが正論を得たものであったことを示す。つまり、彼が、早くから大指揮者としての偉材であることを立証する以外のなにものでもない、ということである。ただ、彼が指揮者としての年輪を重ねるにしたがって、細部の彫琢に込められて磨きをかけ、カラヤン・スタイルを精緻にしていたといえる。このことは、彼のレコーディングにおいてはひととき痛感させられる。レコード史上、録音技術の進歩を自己の音楽表現に積極的にとりいれるという成果を発揮した大指揮者として、1920-50年代のレオポルド・ストコフスキーが有名だが、ストコフスキーの場合はレコーディング効果を積極的に活用するために音楽的バランスをかえることもしばしばあえて行った。カラヤンはストコフスキー以後、録音技術を信頼しその効果を音楽的表現に用いたが、彼の場合は、トータル・バランスのなかに音楽の細密表現をレコーディングによって行えるということを意識した稀なる大指揮者で、この点で、ストコフスキーよりも本格的な成果をおさめた。とくに注目しなければならぬのは、第一に、真のピアノシモに表現をレコードに用いたこと、そのピアノシモに対比するフォルティシモの凄絶さが生みだすダイナミック・レンジの幅の大きさ、第二にはオーケストレーションのテクニクア・バランス、主声部に対する対声部のうごきの表現、そしてハーモニーの美しさや sfz あるいは fp などの音楽的アクセントの効果の見事さである。カラヤンの録音についていふべきことはいくらでもあるが、かんどころだけいえばこうした点にあるといえる。

《新世界》のレコードは実に多数あり、その表現は多様をきわめているが、カラヤンは最初から、シンフ

ォニックな構成美と、そこにただようドヴォルザークの抒情的ロマンティシズムを巧みにうかびあがらせる。中欧系の指揮者が描きだす、風土感の描出とは、対極をなすアプローチだといえるが、シンフォニックな作品としてカラヤンほど《新世界》を美しく表現した指揮者はほかに見当らぬ、といってもよいとおもう。

ドヴォルザークの《新世界交響曲》とそのきどころ

アントニシ・ドヴォルザーク（ドヴォルジャックというのがよりチェコの発音にちかい。1841-1901）は、音楽家としては独学で大成しためずらしい経歴の作曲家だが、1892年、51歳のときニューヨークに新設されたナショナル音楽院の学長に招かれ、生まれてはじめて大西洋を渡った。彼は1895年までこの職にあったが、新大陸の風土は彼の創作意欲をかりたて、晩年の傑作のいくつかをアメリカで書いた。その最初の作品が《新世界》で、ほかにチェロ協奏曲、弦楽四重奏曲《アメリカ》などがとくに有名になっている。《新世界》は1892年10月に渡来した直後に作曲の構想がうまれたが、翌年夏の休暇に同郷のボヘミア人が多く住むアイオワ州スビールヴィルを訪れたときに、最後の仕上げを行い、その1893年12月15日に、アントン・ザイドル指揮のニューヨーク・フィルハーモニックによって初演された。この曲の主題旋律は、ドヴォルザークが新世界できたアメリカのインディアンや黒人の歌の旋律をかりたものといったのは、有名な音楽学者のクレッチマーだが、これはまったくの誤りで、アメリカの民俗音楽から創作のヒントを多く与えられているが、ドヴォルザークの創作である。

この交響曲はやや変則の二管編成で、フルート2（ピッコロ）、オーボエ2（イングリッシュホルン）、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、トライアングル、シンバルそして弦楽5部である。

〔第1楽章〕アダージョのながい序奏部をもったソナタ形式。弱音（pp）でチェロにメランコリックな序奏部の動機が現われる。8/4拍子、ホ短調。ヴィオラとコントラバスが和音をつける。その代わりに木管とホルンが加わってアクセントをつけたのち、フルートが主題をくりかえしたあと、弦が強奏（sfz）で、管楽器と呼応しながら序奏部をもちあげるが、その最後にティンパニも加わり、最後にヴァイオリンのトレモロとティンパニが急激に弱音におちてすぐに、主題にはいつてゆく。（1分57秒より）アレグロ・モルト（2/2拍子）は弦の弱奏をバックに2本のホルンでうたわれる4小節とそれにつづくクラリネットとファゴットの4小節（こちらは音型が細かい）のふたつの対照的なモチーフが結びあわせられている。この主題が大きく発展されたあと、弱音に沈んでゆき、フルートとオーボエが弱音でうたう第2主題（3分5秒）が現われる。この主題はアメリカ的というよりボヘミア的でドヴォルザークの故郷への思いをこめたものといわれているが、その発展で第2主題の変型がフルートとク

ラリネットに現われたところでチェロとコントラバスの出す対旋律の効果が実に美しい（3分43秒）。呈示部は序奏部とおなじように急激な弱音でおわる。（譜面には反覆記号がつけられているが）カラヤンは呈示部の反覆は行わず、4分50秒の強奏（ff）から展開部にはいる。展開部では、2つの主題が、種々の楽器の独奏部にさまざまなかたちで点綴されている手法がドヴォルザークの巧みな手法といえよう。再現部は簡素でみじかく、全管楽器の最強奏のコーダ（8分32秒）では、トロンボーンに主題を印象的に現われる。

〔第2楽章〕《新世界》を世界的にポピュラーにした有名な主題をもつ、ラルゴ（ごくゆるやかに）変ニ長調、4/4拍子の緩徐楽章。6小節の前奏のあとイングリッシュホルン（コールアングレーとも呼ぶ。オーボエを大型にして先端の開口部にふくらみをもたせた楽器）が吹く有名な旋律（38秒より）は、ウィリアム・フィッシャーが合唱曲《家路（Going Home）》に編曲してから広く親しまれるようになった。この旋律を主題にした、三部歌謡形式。フルートとオーボエの重奏（4分28秒）の8小節の中間部のはじまりのあとに、クラリネットが、これまた実に美しくメランコリックな中間部主題（5分6秒より）をうたいあげ、この旋律はすすり泣くようなヴァイオリンの伴奏が印象的。中間部のおわりの方にオーボエが鳥の啼き声をまねたフレーズ（8分4秒）が挿入されている。そして再びイングリッシュホルンが主題をふきはじめ（8分58秒）、余韻爛々たるエンディングに至る。ドヴォルザークはロングフェローのインディアンのうたった哀詩《ハイアワサ》からこの楽章の楽想を得たといわれている。

〔第3楽章〕モルト・ヴィヴァチェ（きわめていきいきと）、ホ短調、3/4拍子のスケルツォ楽章。ほぼ全合奏で勢いよく開始されるが、ここではじめてトライアングルが参加して効果的につかわれている。このスケルツォで特徴的なのは、フルートとオーボエの重奏（1分40秒）からはじまる中間部主題が第1楽章の第1主題の変型したかたちで投影されていることと、リズムの独特な扱いであろう。一説にはこの楽章も《ハイアワサ》のインディアンの結婚の祝いを扱った部分のイメージがなげかけられたものだといわれており、そのスケルツォ主題と、トリオのボヘミア民謡調との対比にドヴォルザークの郷愁がこめられているという説をなしているひともある。一旦主題がくりかえされたあとのコーダ（7分39秒より）へのエネルギーなもちあげのあと、最弱音に沈んで、全休止のあと、強奏の和音できりっとしめくくられている。

〔第4楽章〕アレグロ・コン・フォコ（火のようないきおいをもった早いテンポ）、ホ短調、4/4拍子。弦だけのけいけい前奏のあと、トランペットとホルンに堂堂たる主題が現われる（15秒より）。この行進曲風主題がもちあげられたのち、クラリネットに対照的な抒情性をもった第2主題が現われる（1分47秒より）。ついで第1楽章の主題の変型がフルートに出たり（2分34秒）、こまかい細工がなされており、大きな起伏がくりかえされながら、ホルンの間奏（8分5秒）から力づよい全合奏の輝やかなフィナーレがくる。

■DAMハイクオリティ・レコードについて

最近のデジタル・オーディオ技術とその周辺技術の急速な進歩でハード、ソフト共に著しく多様化しており、PCMテープ、デジタル・オーディオ・ディスク及びビデオ・ディスク等による新しい記録媒体の開発と実用化に併い、多種多様なソフトテクニックと音楽へのアプローチの仕方が一段とエスカレートして来ております。同様にいかにより高い音楽性とオリジナル演奏の忠実なトータル・サウンドを完成させるか、ソフト技術以上に製盤技術の開発もここに来て厳しく、高密度、高品質化の一途を辿っています。その中で特にビデオ・ディスク及びコンパクト・ディスクの開発技術によって得られた製盤の周辺技術とノウハウを最大限に駆使し、従来のマスプロ的仕様とは性格の異なる、手作りのプロセスを経て制作されたものがDAMレコードであります。

オーディオ・マニア諸氏はもちろんのこと、音楽ファンの皆様も年2回企画されているDAMレコードについては、常に新しい試みがなされ、前向きな姿勢で技術的テクニックとそのトーン・キャラクターを追求し、より忠実な音楽の再現を制作ポリシーとしている意図を理解していただいていることと思います。

そこで今回のハイクオリティ・レコードの特徴を述べてみます。

レコード(フラット・ディスク)形状

一般レコード形状は、音溝部を保護する為にレーベル部とレコード周縁部にグループガードをほどこして、音溝部が直接に接触しない様に厚くなっております。これが一方では、レコード再生条件や音質への影響を考慮した場合必ずしも望ましい形状では無いようです。

例えばa)グループガードの傾斜している溝部に再生針先が正規な溝壁面接触しないままトレースする為に、異状音の発生やノイズの発生原因となります。b)ピックアップを下す時へたをすると、針先が滑って音溝部までジャンプする事もキズの原因となります。c)ピックアップによっては、カートリッジの底がグループガードに接触することもあります。d)音質への影響としては、断面形状から解るように、ターンテーブル・シートと音溝部の密着性が悪くなり、レコード固有共振を起こしやすい状態にあると云えます。



Fig 1 一般のレコード a-b=0.6(mm)

Fig 2 新フラットレコード(ディスク) a'-b'=0.2(mm)

御存知のようにステレオ音溝は、水平振幅は左右信号の和(L+R)、上下振幅は左右信号の差(L-R)として録音

カッティングされており、特に本レコードのように通常のレコードより+5dB程もハイレベルでカッティングされた複雑な音溝の再生は、より以上のカートリッジの振動エネルギーでレコード盤を烈振させ、レコードの固有共振によって音質への影響が十分に考えられます。

共振はマスとコンプライアンスの積で表わされますから、レコードの固有共振はレコードを厚く重くすることでマス成分を増して共振を下げ、更にレコード平面均一性の精度を上げ、フラット面に形状変更することでターンテーブル・マットとの密着性を大幅に改善し、共振によるレコードとターンテーブル・マットとの間に起こるリアクションを緩和させる事を可能にしました。これにより今までに無いサウンド・キャラクターが得られ、特に中域から低域の分解能を一段とクリアーにして、そのナチュラルな響きはよりオリジナル・サウンドに近いものと確信しております。

ターンテーブル及びターンテーブル・マットの材質、形状によっても音質の変化があるように、レコード形状、質量によっても音質へ影響するファクターは充分考えられますが、今回のこのレコードは特に再生条件を考慮した上で新フラットプロフィールを採用致しました。

一般レコードとの比較

重量比	30%up
厚さ比 最厚部	15%up
最薄部	65%up

更に偏心の要因の1つであるセンターホールとプレーヤーのセンターピンとのガタについて注目し、先ず市販プレーヤーのセンターピン寸法を調査してその結果でレコードのセンターホールの設計変更を行い、最小限ガタツキを減らす為にセンターホールの径を小さい方向に持って行きました。

■クォーツ・ロック、厚手レコードについて

従来のシンクロナス・ダイレクト・モーターによる大振幅のカッティングでは、動的ワウ・フラッター(ダイナミック・ワウ)が少なからず音質に影響を及ぼしますが、今回の“DAM45”では、高精度にサーボされたクォーツ・ロック D.D.モーターとダイヤモンド・カッター針を採用することで、ディスク・マスタリング時に於けるクォリティを高め、以前にまして余裕のある音溝巾と大振幅にたえられ、たっぷりとしたピッチとディプスがコントロールされるようになりました。

現在のレコードは再生系機能のグレード・アップに伴い、一段とDレンジ、Fレンジ、及びリニアリティ等、大幅に飛躍しています。振幅(P-P) 250 μ ~280 μ 、[L-R]、ピーク・レベル+20dB程度のものは数多く高密度レコード化しております。このような高密度レコードの溝波形を完全に

トレーシングする為に再生時の技術的ノウハウ、及びそのテクニックがいろいろ考えられ、かすかすのオーディオ誌上でも論じられています。ヘッド・シェル、トーン・アームやターンテーブル・シートの共振問題等々……。たとえば、ターンテーブル・シートを例にとっても、ゴム、なめし皮、ガラス、金属等、変える毎にその音質の変化は確実に差があります。このように再生時の高忠実トレーシングはさまざまな問題が残されています。

それでは、ディスクそのものはどうかと考えますと、時期、薄いレコードはプレスでの塩ビ成形性が良いとされ話題になりましたが、レコードを厚くする(質量を増す)ことでレコードの共振を下げ、更に再生時のレコードとターンテーブル・シートとの間に起る共振を緩和させることで、中音低域の分解能が一段とクリアーになり、特に深みの有る、伸びた重低音の再現とバランスされたダイナミックなパワー感を充分にお楽しみ下さい。

この種のレコードは、特に安定度の高い盤質が必要とされますが、従来からのプロフェッショナル・レコードで開発した材料をベースに、新タイプの配合剤、熱安定性効果の高い安定剤の組合せにより、一層ゲル化性の改善を図り、また更に新タイプ帯電防止剤による静電除去効果ともあいまって極めて安定度の高い、この厚手レコードが生まれ、リアリティの良いダイナミック・レンジをもつオリジナル・サウンドの再現を可能にしました。

30センチ45回転レコードの取扱いについて

このレコードは、通常の33 $\frac{1}{3}$ 回転レコードと変わった点はありませんが、念のため次のことに御注意下さい。

- (1)オートプレーヤー、オートチェンジャーでも使用出来ませんが、ある特殊なものでは完全な自動演奏が出来ないこともあります。このような場合、手動方式に切替えてお取扱い下さい。
- (2)回転が早くなるために、レコードの反りの影響が33 $\frac{1}{3}$ 回転にくらべて出やすくなります。レコードの保管、取扱いには充分注意して下さい。
- (3)再生する部屋の温度が低いと、カートリッジが正しく作動しないことがありますのであらかじめ室温を15 $^{\circ}$ C~20 $^{\circ}$ C位に保って下さい。
- (4)再生時には特にアームのラテラル、インサイドフォースのバランス、及び再生針の摩耗状態、針圧(メーカー指定の重い方にセット)には充分気を付けて下さい。
- (5)このレコードは、ハイクオリティのオーディオ・チェック・レコードのため、カートリッジによってはトレースがむずかしい場合があります。

レコード材質——プロユース材料使用

Recorded : 2&3 January, 1977, Philharmonie, Berlin
Recording Producer : Michel Glotz
Balance Engineer : Wolfgang Gulich

■カッティング・データ

Cutting Date : 28 September 1984
Toshiba-EMI Akasaka
Tape Recorder : Studer A-80 MK II
Drive Amplifier : Neumann SAL-74
Cutting Lathe : Neumann VMS-80
Quartz Rock Motor
Cutting Head : Neumann SX-74 Non Limiter
Non Equalizer
Cutting Engineer : Shogo Takeuchi

企画・制作 第一家庭電器株式会社
製造 東芝EMI株式会社